

問題 I 次の文章を読んで、問 1～問 3 に答えなさい。

1990 年代後半頃から、男女を問わず成人になってからも親と同居する未婚の若者が増えました。国立社会保障・人口問題研究所による世帯動態調査によると、その割合は徐々に増えています。親と同居する内的条件も外的条件も整っていることは確かです。親の寝室より充実している子ども部屋、食事や洗濯を含めた身の回りの世話をみってくれる母親、親に依存していた方が経済的にも肉体的にも便利で楽なのは間違いないでしょう。家を出て一人で生活すれば、衣食住すべてを自分で賄わなければならない、面倒な上に経費がかかります。子どもにとっては経済的・時間的な合理性を考えると、自然な選択なのかもしれません。

そんな状態で親の元に住む若者は (1) パラサイトシングルと呼ばれていますが、この呼び名は 1999 年に、家族社会学者の山田昌弘氏によって提案されたものです。

当時、独身貴族として優雅な生活を謳歌していた若者も、それから 10 数年を経て、30 代、40 代になっています。親もその分だけ年を重ね、既に老後生活を送っている人がほとんどです。そしてパラサイトシングルが親の老後を大きく狂わせる状況になっています。定年後の生活設計の見直しを迫られている親が、ますます増えているのです。

パラサイトシングルから数年後、「ニート」という定義が現れました。これは、学生でもなく職業にも就かず、また職業訓練や就職活動もしないという若者で、マスコミに大きく取り上げられて社会問題化しました。ニートも多くの場合親と同居し、経済を含め生活の大半を親に依存しています。そういった意味ではパラサイトシングルと同根の問題だと言えます。

この問題は、経済的な問題だけでは解決できない根の深さを持っており、社会的に自分の居場所を見出せないという点においても共通しています。もちろん、社会の閉塞感やグローバル化による社会の枠組の変容など、時代の変化による影響もあると思います。その一方で、親がどんな子育てをしてきたのか、という問題も見逃せません。

子どもの自立は乳幼児期から思春期を迎える手前、12 歳頃までの育てられ方に大きく左右されます。親の子に対する接し方ももちろん重要ですが、子ども部屋をどう考えているのかという問題が、子どもに大きな影響を与えます。子どもが自分の居場所をつくれる、あるいは自立できる力を身につけさせる。住まいにはそういった役割もあるのです。子どもが育つ中でもっとも長い時間を過ごす場所が、住まいであり子ども部屋です。それをどう作り与えるのか、親の責任が問われるのです。

かつて私の家に、ブラジルから高校 3 年の男の子がホームステイに来ていました。彼は、国に帰って大学に入ったら、親から離れて自立すると言っていました。彼が進学する大学は、親と住んでいる家のすぐ近くだそうです。日本なら当然家から通わせるでしょうが、彼の友達を含め、みんな (2) 大学生になれば親元から離れるのが当たり前だと言っていました。小さい時からそのように教えられてきたのです。

パラサイトシングルは、先進国の中でも日本だけの現象です。「個の自立」という近代が抱えてきた問題もあるでしょうが、親の子離れ、子の親離れができていないのです。

子どもが成長する中で、親の方針や考え方が、子の自立に大きく影響を与えるような大事な局面がいくつかあると思います。私は、そのひとつに子ども部屋に対する考え方と与え方があると考えています。子どもの精神的な成長を見ながら、子どもに部屋を与える時期、あるいはその意味を改めて考えてみる必要があります。親が与えた部屋のあり方は、親の子に対する考え方、親子の関係がそのまま投影されるものです。親は「子どものため」と言いながら、安易に住まいを考え、容易に子ども部屋を与えすぎているような気がします。子どもが本当は何を求めているのか、子どもに必要なものは個室なのか、考えたことがあるでしょうか。仮に現在子ども部屋として用意している部屋があったとしても、その時期が来るまで与えないといった親の意思も大切だと思います。

(横山彰人：住まいに居場所がありますか？、筑摩書房、2009より引用、抜粋、一部改変)

問1 著者は、どのような人を (1) パラサイトシングルと述べているか、文中の言葉を用いて60字以内(句読点を含む)で書きなさい。

問2 著者は、ホームステイをしたブラジルの学生を例にあげ、下線部(2)と述べている。彼らがそのように言う理由を著者はどのように考えているか、文中の言葉を用いて60字以内(句読点を含む)で書きなさい。

問3 あなたは、子どもが自立するためには、親や子どもがどのような努力をすべきと考えますか。問題文の内容に沿って、あなたの考えを200字以内(句読点を含む)で書きなさい。